

【論 説】

自生的秩序の構造的把握

山 崎 弘 之

目 次

- 1 自然の斉一性の原理と秩序
- 2 演繹的方法
- 3 経験と超越論的なものとの総合
- 4 因果律の世界と自由の世界との総合
- 5 自主的秩序を取りまく抽象化、類概念の構造

1 自然の斉一性の原理と秩序

ハイエクは、スミスの「偉大な社会」を挙げて、社会や経済の自然な秩序を説いてきた。それによると、自然は、社会や経済が個人から見て「意図せざる結果」であるとしても、調和や秩序をわれわれに贈っているという事実が現にあるということである。では、この「意図せざる結果」という調和は、どのようなメカニズムによって成り立っているのか、これが説かれねばならない。自然がもたらす調和、秩序という斉一性が課題になる¹⁾。いわば、ハイエクの秩序を論じる場合、まず避けて通れないのがヒュームの自然の斉一性の原理²⁾ではなかろうか。もちろん、この自然の斉一性の原理はいわゆる帰納法で理解されてはならない。オーストリア学派経済学はむしろ演繹法である。このヒュームの自然の斉一性の原理はほぼ同様な形でメンガーの『経済学の方法』で説かれている。この一節ほどハイエク理論の前触れを告げるものはない。メンガーは、この自然の斉一性の原理を自然法則 (Naturgesetz)³⁾ と言い換えて、次のように言う。

「一般に可能な限り、経験によって確認されるばかりではなく、まさにわれわれの思考法則によって疑いの余地なく確認されており、したがって理論的研究の精密的方針にとってもっとも基礎的な意義をもっている、理論的真理にたいするただ一つの認識原則は、ただ一回だけでも観察されたことは、厳密に同じ事実的条件のもとでは、絶えず繰り返し現象とならなければならない、…この原則は現象の本質（Wesen）についてばかりではなく、程度（Masse）についてもあてはまるのであって、経験はこの原則の例外を決して与えないばかりではなく、批判的な悟性には例外といったものはむしろまったく考えることのできないものとさえ思われる。」さらに、「理論的研究の精密的方針にとって同じくはなはだ重要な、もう一つの認識原則—すなわち、或る現象継起についてただの一回だけでも重要でないと認識された事情は、厳密に同じ事実的条件のもとでは、同じ成果について、いつも、また必然的に、重要でないことが証明されるだろうという命題—は上記の命題の相関命題（ein Correlat）にすぎない。」⁴⁾

比較のために、ヒュームの自然の斉一性の原理に関する記述をあげてみよう。ヒュームは『人間本性論』において、「経験されなかった事例は、経験された事例に必ず類似し、自然の歩みは常に一様に同じであり続ける」⁵⁾と言い、この原理を明らかにしようとする。さらに「われわれは、或る対象から一度帰結することを観察したものは、その対象から常に帰結するであろうと結論する。」⁶⁾と言う。ヒュームの文章とメンガーの文章との酷似に誰もが気づくであろう。表面上見る限り、メンガーがヒューム哲学の生まれ変わりと言えるほどである。ヒュームの言説がそのまま受け入れられているように見える。

メンガーの「ただ一回だけでも観察されたことは…絶えず繰り返し現象とならなければならない」は、ヒュームの「われわれは、或る対象から一度帰結することを観察したものは、その対象から常に帰結するであろうと結論する。」が対応しよう。これは強い自然の斉一性が主張されている。しかし、周知のように、因果律に破綻したヒュームにとっては、自然の斉一性は帰納法や形式論

理における三段論法⁷⁾によってのみ説明されるものではなかった。いわば、恒常的随伴（constant conjunction）は非反復であり、自然の斉一性は反証がなされない限り認められるという弱い経験論によって説明される。すなわち、原理として直接経験ではなしに間接経験で得られる信念に依存する⁸⁾。そして調和、秩序を課題とする限り因果律は総合判断に組まれねばならない。科学はアプリアリな総合判断でなければならない。経済学は、そのアプリアリ性を含意した人間を対象としている。つまり、これは自然の斉一性の原理が帰謬法（以下で述べる捨象）や人間の内省に入らざるを得ないことを意味している。ヒュームは言う、「必然性とは、対象のうちにではなくて精神のうちに存在する何か」⁹⁾である。慣習で獲得されない自然の斉一性は「似た対象は似た条件のもとでは常に似た結果を生み出す」¹⁰⁾とも言い表される。ヒュームの自然の斉一性の原理は演繹法で主張されていると言っても過言ではない。メンガーが「相關命題」を提示する理由である。いわば帰謬法（捨象）を暗示する。「相關命題」は演繹法に不可欠なものである。しばしば、経験は価値意識に根を置く棄却の対象となる。メンガーが倫理を強調する所以である¹¹⁾。

この帰納法と演繹法という課題は、二つの緊張とその調停という新たな課題をを与える。つまり因果律（必然性）と自由（偶然性）、換言すれば経験的なものと超越論的なものである。これはヒュームのみならずカントの中心課題でもあった。ハイエクは見事にこれらを乗り越えているように見える。これはまたメンガーから得た課題であり、ハイエクに引き継がれていることは言うまでもない¹²⁾。いわば、“過去の誤った信念を新しい目的の下に棄却し続ける”¹³⁾、という進化経済学の命題であり、自生的秩序に含意されている。これを筆者は「…からの自由」と言ってきた。

メンガーの文章・「経験によって確認されるばかりではなく、まさにわれわれの思考法則によって」とあるが、この「思考法則」はその直後に述べられる「本質」に関係し、「経験によって確認される」は「程度」に関係すると思われる¹⁴⁾。「本質」は背景にヒュームの自然もしくはカントの超越論的なもの、すなわち主観、「程度」は両者を貫く経験的なもの、機械論的因果律を指してい

自生的秩序の構造的把握（山崎）

と思われる。いわば、メンガーの方法論に超越論的（先験的）なものと経験的なもの、双方が含意されている¹⁵⁾。

ハイエクにも決して表面化されているわけではないが、自然の斉一性の原理を確認することができる。ハイエクは自然に「成長する秩序」を説明して、『秩序』によって、われわれは全編を通じて、様々な種類の多様な諸要素が相互に密接に関係しあっているので、われわれが全体の空間的・時間的なある一部分を知ることから残りの部分に関する正確な期待、または少なくとも正しさを証明できる可能性の大きい期待をもちうる事象の状態を、叙述することにする。」と言う¹⁶⁾。つまり、「ある一部分を知ることから残りの部分に関する正確な期待」から自然の斉一性の原理を受け入れているように見える。いわば、秩序が維持され「自然の歩みは常に一様であり続ける」なら、未経験な「残りの部分」も期待できるのである。

かくして、オーストリア学派経済学への視点はまずもって哲学者、ヒュームおよびカントにその源を向けねばならない。いわば、自然の斉一性の原理における「似た条件」における人間、その内容として、経験と超越論的なものとの総合が課題となる。それはカントの中心的課題でもあった。カントがいみじくも述べてきたように、因果律と自由とは調停し調和を生む。ならば、カントのアンチノミー¹⁷⁾が避けて通れない。人間は要素としてこのアンチノミーの調停に組み込まれなければならない。カントは言う。

「判断力は…自然そのものに法則を指定する（自律〔Autonomie〕として）のではなく、自然に対して反省を施すために自分自身に法則を指定する（自分自身に対する自律〔Heautonomie〕として）のである。…判断力はこの法則を自然においてア・プリオリに認識するのではなくて、判断力が多様な特殊的法則を、普遍的法則に従属させようとする場合に、これらの普遍的法則を類と種とに区別することによって、我々に悟性に認識され得るような自然秩序を発見するために、これを想定するのである。」（下線は筆者）¹⁸⁾

かくして、オーストリア学派経済学は、あるがままの経済を対象する経験科

学ではなく、建築家のように調和を求め構築する科学である。言葉を換えれば、個人は斉一性（調和や秩序）を求めて、演繹的かつ体系的に結ばれねばならないのである。このような方法を「方法論的個人主義」¹⁹⁾と言ってきた。

2 演繹的方法

ハイエクは、メンガーにならって経済学という「社会研究は人間の行為に関心をもち、その目的は多くの人の志向せざる、または意図せざる結果を説明するところにある」²⁰⁾と説く。いわば、まず18世紀のスコットランド啓蒙主義者・バーナード・マンデヴィル、ディヴィッド・ヒュームやアダム・ファergusンに依存する²¹⁾。ファergusンは言う、経済は「人間の行為の結果であるが人間的设计の結果ではない」²²⁾し、また経済は「個々人が利己的であろうとなかろうと、人によって大きく相違している知識や意図を調和させるという」²³⁾恩恵をわれわれにもたらす。その「利害の一致は、それが人間の行為によって形成された制度から独立しているという意味で『自然的』でもなければ、またそれが意識的整序によってもたらされたという意味で『作為的』なのでもない。利害の一致は自然発生的に成長した諸制度の結果なのである。」²⁴⁾ 経済が経験的に「自然発生的に成長した諸制度」という意味で、また個人の「利害が一致する」という意味で、自然に対する畏敬の念が生起する。これが演繹的方法の出発である。

この「意図せざる結果」でありながら、われわれに恩恵をもたらすものは、貨幣、市場など経済に関するものだけではない、法、言語等の社会現象にまで及ぶ。ハイエクは、このようなシステムを「偉大な社会」²⁵⁾と度々述べてきた。しかしながら、同時にこのシステムは「観察されるものを何ひとつ表していない。それらは関係の構造を表している。しかもその構造は、ある図式的表現によって、あるいは絶えず変化する要素間の関係の一貫した体系に関する理論によってのみ記述される」²⁶⁾とハイエクは言う。「個人が自己の行為を理論化した結果からではなく個人を行為に導いている概念から体系的に出発する」²⁷⁾と

いう演繹的方法を採らねばならない。

しかしながら、「意図せざる結果」を個人間の構築として把握するということは形容矛盾ではないか、素朴な疑問が沸く。なぜなら経済現象が「観察されない」ことや「意図せざる結果」では、個人と直接結びつかないのではないかと…。これに対して、ハイエクの学兄・ミーゼスは言う「個人の行為以外に、社会の実体はない。…国家の構成員を認識することなく国家を認識できた者はだれ一人いない」²⁸⁾と。さらに「人間行為にかかわる限り、行為する人間がそう考えるものが事物なのである。」²⁹⁾判断はあくまでも個人の認識にあり個人が要素として基底に与えられていることになる。同時に、人間はあくまでも体系に導かれる人間である。「要素が選択される理由は、この要素の結びつきが、ある一貫した原理体系によって説明されうるからであって、この要素が具体的現象に関する特定の問いに答えるのに役立つからではない。」³⁰⁾ いわば、課題は要素間の「一般的意見によって是認された一般的原理への委託という要件」³¹⁾である。この要件こそ「意図せざる結果」を生起させる行為の元である。その理論は、また「一般的意見」という意味でよりヒュームの立場、「一般的原理への委託」という意味でよりカント的立場が要請される³²⁾。これがカール・メンガーから継いだ「方法論的個人主義」である。メンガーはこの方法を「精密の方針」(die exacte Richtung)と言った。この「一貫した原理体系」を経済学的立場から深く解明したところにハイエクの貢献がある。つまり、現象は、われわれ人間が設計や計画で作成したものではない。言葉を換えれば、自己が社会的現象そのものの全体を知り構成する科学ではなく、自生的秩序に守られて生成している自己を知ることにある。Heautonomieとしての自己が常に問われる。ここに個人と社会（もしくは経済）間に、一元的結びつきがある。つまり、体系に従う個人、いわば演繹的方法が確認される³³⁾。

3 経験と超越論的なもののとの総合

では、演繹によってもたらされる調和とはどのようなことなのであろうか。

経済現象（全体）は「観察されるものを何一つ表わしていない」が、われわれに調和を感じさせるが故に「個人を行為に導いている概念」である。この調和は個人の意図した作為の産物でもないし自然科学が対象とする無作為の対象でもない。まさに経済は第三の対象（ないしは世界）である³⁴⁾。これはヒューム哲学やカント哲学から贈られた演繹的思惟である。つまり思弁的なのである。

社会科学は人間行為の世界であり現象である。カントは社会科学の現象を自然科学の現象と峻別した。つまり、前者を *Phänomenon* と言い、後者を *Erscheinung* と言った³⁵⁾。この区別こそ、ハイエクが第三の対象を編み出した源ではなかろうか。既述のように、人間は行為の上で常に自由（偶然性）と因果律（必然性）の中にいる。これをより明確に意識したのはカントである³⁶⁾。これは一見して二律背反に見えるが故にアンチノミーと名付けられた。しかし、カントはこれが調停可能であると見たことは言うまでもない。結論的に言えば、超越論的な「可想的性格」（*ein intelligibler Charakter*）を通して、調停がなされると見たのである³⁷⁾。ハイエクの自生的秩序—経済—はこの調停された世界に入る。その意味で、カント（やヒューム）が筆をおいたところから始めなければならない³⁸⁾。それでは、調停される世界とは何か。

ハイエクに見られる特徴は、“過去の誤った信念を新しい目的の下に棄却し続ける” —既述の「…からの自由」— という方法である。これには、まずヒュームが命題を与えたように見える。既述のように、社会科学における自然の斉一性の原理は一時的に経験を棄て主観に依存せざるを得なかった。では、経験や「慣習を弱める」自然の斉一性の原理とはどのようなものであろうか。ヒュームは言う。「われわれは、或る対象から一度帰結することを観察したものは、その対象から常に帰結するであろうと結論する。この一般原則が常に確実なものとして頼れないのは、十分な数の実験〔経験と観察〕が欠けているからではなくて、われわれがしばしば〔当の事例とは〕逆の事例に出会うからである。このことは、われわれの経験と観察のうちに反対（対立）が認められるところの第二種の蓋然性へと、われわれを導く。」（〔 〕内は筆者注）³⁹⁾ この第二の蓋然性とは「われわれは普通、過去の事象の反対性を、意識的に考慮する。…

この種の推論（第二種の蓋然的推論）は「一般に」、習慣から、直接生じるのではなく、間接的な仕方では生じる。」⁴⁰⁾ かくして、帰謬法によってさらなる進展が図られる。自然の斉一性は、恒常的随伴は反証を受けない限り有効である。つまり恒常的随伴に基づく斉一性は「逆の事例」の否定によってもまた可能である。否むしろ、これこそ社会科学方法の核なのである。帰謬法から出発した主観の条件は過去から未来への構築と進化を生まずにはおかない。ヒュームは帰謬法によって、条件を整える。その条件とは倫理や自由である。いわば、主観が分析されカントに引き継がれるざるを得ない余地をもつ。いわば、ヒュームが「狭い意味で経験論を捨てている」⁴¹⁾ は、まさにカントによって補完されねばならない⁴²⁾。つまり、コペルニクスの転回⁴³⁾ に基づく構築と進化である。

では、ヒュームが言う、過去から未来へ「基準」「類似」「投影」とはどのようなことであろうか。と言っても経験から始まることに変わりはない。これをカント的に言えば、経験的なものと超越論的（先験的）なもの、二つが含意されている⁴⁴⁾。カントは言う。「およそ行為は、…純粹理性の可想的性格が直接に生じせしめた結果である…従ってかかる行為は自由であり、…かかる自由を…消極的にも積極的にも出来事の系列をみずから始める能力と名づけることができる。」（筆者修正訳）⁴⁵⁾ いわば「経験的性格そのものが…可想的性格（思维様式）によって規定されているのである。」⁴⁶⁾ しかしながら、また「人間そのものは現象である。人間の意志は経験的性格を有する、そしてこの性格が彼の一切の（経験的）原因なのである。」⁴⁷⁾ とも言う。経験的性格、可想的性格どちらに原因があるのであろうか。人間は現象であり、他の諸現象と同様に現象に組み込まれる。この限り一定の法則をもって他の現象と係わりをもつ。現象界はこのヒュームの統一的連続性をもって人間に迫る、その意味で経験的性格が察知せられる。その経験を介して可想的性格が発現される⁴⁸⁾。可想的性格こそ自由の原点である。自由は超越論的なものである。換言すれば、因果律に入り込む自然な自由、このメカニズムこそ一定の法則である。ハイエクの自由もカントの可想的性格に支えられていると思われる。

ハイエクの思想は諸所すこぶるカント的である。『感覚秩序』に見られる

「物自体」の可想（信念）もそうである⁴⁹⁾。この「物自体」は、人間の有限性を根底から説く壁であり、同時に能動性と動態を編み出す根拠でもある。ここに科学の磁場としての客観性が生起する。いわば、有限であるが故に客観的であり体系的である。その意味で、現象は常に経験的でなければならない。カントは言う、「理性にとって最も大切なことは、——自然の産出における機械的組織を放棄しないこと、およびこの産出を説明するに当たって自然のかかる機械的組織を看過しないことである。このような機械的組織に着目しないと、物の自然的本性に対する洞察を獲得できないからである。」⁵⁰⁾ 経験に常に寄り添う超越論的なものを確認する。ここに「発見的原理」⁵¹⁾がある。まさに、カントは構築の哲学を築いたのである。

合理主義⁵²⁾に対する反動の思索からヒュームは人間本性を説く。この淵源も、よって来るところたぶんにはマンデヴィルにあるとハイエクは見る。ハイエクは、反合理主義への慢心に警鐘をならしてマンデヴィルの言葉を引用する。「私たちは私たちの行為の理由を知らないということと、私たちの意思決定の結果は予想するところとしばしばきわめて異なっている」と。いわば、カントのアンチノミーを予期するものである。またハイエクの第三の世界を予期するものでもあろう。彼らは共に懐疑論者（不可知論者⁵³⁾ではなく）であるがゆえに進化が展開される。まさに、逆説的にマンデヴィルは「進化と秩序の自生的形成という…近代思想上の決定的な突破口を開いた」⁵⁴⁾のだ。その意味で、反合理主義が啓蒙主義となったが、真の啓蒙主義はマンデヴィル、ヒュームそしてカント等ごく限られた人々なのだ。ハイエクが彼らの線上を歩んでいることは言うまでもない⁵⁵⁾。

この逆説をカントのタームを用いて述べよう。社会現象はわれわれの意思決定とはしばしば異なるという事実である。では、個人とこの間を埋めるものは何か。「行為の理由を知らない」は、決して懐疑に終わるのではない。構築するのであり、経験はすべて経験に依るわけではない。経験は超越論的な何かを必ず確認する。マンデヴィルの思索は、精神科医として知覚のメカニズムを通して懐疑性とまさに逆説的に自生的形成の過程を読みとった。これはヒュームや

カントに先駆けていた。ヒュームの自然やカントの可想的な理性の世界を先取りしていたのである。ヒュームが「対象を比較することによって距離の概念を得る」⁵⁶⁾と述べたとき、物を見ると空間や時間が自然に生起することを意味している。これは個人に内在してつまり無意識の下で形式化（秩序を築く）という機能に気付いたことを意味している。有限⁵⁷⁾を補う秩序が生起し体系（概念）が生じる。ここに概念とともに客観性が語られる。いわば思考形式である。認識には体系（概念）が相即不離に生起する。ハイエクの体系もこの体系下にある。カントはこの機能を精緻化し経験を所与（経験そのもの）と超越論的なもの⁵⁸⁾とに峻別した、認識はこれらの総合⁵⁹⁾と見た。機能とは、決して生得的ではなく「根源的に獲得」⁶⁰⁾されるのである。マンデヴィルは、既にこの体系化を導く超越論的なもの（時間、空間）を発見していた。このことにおいて、自然科学も社会科学も相違はない。ただ、社会科学は体系に導かれ演繹法と「発見的原理」に貫かれねばなるまい⁶¹⁾。社会科学は人間を対象とするからである。その意味で、経験と超越論的なものとの総合なのである。

4 因果律の世界と自由の世界との総合

ハイエクの総合はさらに一步進めたものであると言えるのではなかろうか。経験は超越論的なものと共に歩む、ということを脳の機能メカニズムに発見したのはマンデヴィルであった。その命題が、ハイエクをして理論心理学、すなわち感覚秩序の解明に駆り立てたことは間違いない。その命題が正しいのなら、ヒュームやカントが必ずしも具現に成功したとは思われない、自由（偶然性）と因果律（必然性）との調停（調和）が理論によってさらなる展望が開けると、ハイエクは考えたに違いない。では、ハイエクの自生的秩序や調和とはどのようなものか。ハイエクは、謙遜して「最初にアイデアを考えついて、なし得たということではないが」⁶²⁾と述べているが、この方法はこれまでにない新たな挑戦的試みを含んでいると思われる。それは感覚としての抽象化にある。

ヒュームの場合、自由と因果律は後の著作で統一的連続的に結ばれるが⁶³⁾、

まず『人間本性論』の「抽象観念」に見られる⁶⁴⁾。パークリーの「普遍代表説」⁶⁵⁾を信奉するヒュームは言う。「抽象観念は、その代表（表象）の働きにおいてどれほど一般的になろうとも、それ自体においては個別的（particular）なものである。精神のもつ表象は、推論においてまるで普遍的であるかのように使用されるが、一つの個別的対象の表象にほかならない。」⁶⁶⁾ 個別的なものはどこまでも個別的である。そうであるが故にその個性性は表象される。その表象とはどのようなものか。「一つの個別的観念が一般的となるのは、それが一つの一般名辞に結びつけられることによる。すなわち、習慣的随伴によって他の多くの個別的観念と結びついておりそれらを容易に想像力に呼び起こすような名辞に、結びつけられることによるのである。」⁶⁷⁾ と。個別観念の結びつきが習慣となり想像力を生起させる。想像力の働きはまた一般名辞、言語に表れる。個別的であるが故に抽象を生起させる。抽象とは他の事象に及ぶより拡張的概念化の機能である。いわば、対象間に共通の確定的要素を何ら共有しないが類似性をもつという信念⁶⁸⁾である。カントもヒュームと同様にこの抽象化を捨象と捉えることを怠らなかった⁶⁹⁾。

ヒュームの因果的な必然的結合は、帰謬法と同様に「精神にのみ属する」⁷⁰⁾「内的な印象、すなわち反省の印象」⁷¹⁾に入る。ヒュームの貢献は、因果律という必然性と自由という偶然性が統一的連続性におかれていることにある。これもまた構築に基づくカントの発見的原理に通じる。ハイエクはこの必然性と自由を感覚の秩序に見ている。

ハイエクは『感覚秩序』で言う、「感覚的な質の秩序は、物理的な事象の秩序と同様に、関係の秩序であるということである。」⁷²⁾「この秩序の要点の一つは、さまざまな感覚の種類が分かれているとはいえ、…一定の仕方では、互いに似たり、異なったりするという意味で」ある。「どのような色、におい、音、温度でも、あるいは、滑らかさや湿っぽさのような、どのような触覚でも、また、形やリズムのような経験でも、共通する何かをもっており、…このように経験される類似性は、普通にわれわれが気づいているよりもはるかに広いことが、実験によって示されている。…例えば、…音の明さがライラックの匂い

の明るさと同じであることを容易に見出すであろう。」⁷³⁾ 音と光は抽象的に結びつけられている。この抽象に、感覚がカントなら理念、ヒュームなら自然の下で意図や価値が介在して抽象（捨象）が進む⁷⁴⁾。いわば、抽象は秩序を編み出す絆である。

ハイエクは『ハイエク、ハイエクを語る』で言う。「異なった感覚的質の差を何が決定しているのか、…試みようとしたことは、その感覚の質の差を因果結合のシステムに置き換えてみることである。つまり、（観念）連合という特定の感覚機能の質—たとえば青の属性その他何でもよい—は、行為を導く潜在的結合システムにおけるまさに局面にあるということなのである。」（一部筆者訳）⁷⁵⁾ これは感覚の質の差がある統一的連続性（偶然性）にあること、換言すれば、自由と因果律が結ばれていることを意味する。自由と因果律の接点が語られている。これは専らヒュームの記述である。

カントなら目的意識に委ねられる。なぜなら、感覚的質の差が個別にとどまらず一般名辞に移されるのは専ら自由（目的）を契機としている。「この概念は、元来自然における所産の概念として、一方では自然必然性を含むと同時に、また他方ではこの同一物において、対象の形式の偶然性（〔普遍的〕自然法則に関する限り）をも含んでいる。」つまり「自然目的の概念は、自然における物を可能ならしめる根拠を含むと同時に…また我々にとっては絶対に認識され得ないような（即ち超感性的な）或るものとの関係を可能ならしめる根拠をも含んでいなければならない。」⁷⁶⁾ 自然はその自然必然性（因果律）では説明しきれない何かを含んでいる。この懐疑性は偶然性（自由の世界）を要請する⁷⁷⁾。同時に、この自由のためには、ハイエクが強調していたように、事実感覚による抽象化が先んじて常に生起し備えている⁷⁸⁾。ヒュームの言えは、感覚を結ぶ集合は常に開いた集合である⁷⁹⁾。カント的には、因果律に収まらない何かを求める自由が常にアプリアリにあり続ける⁸⁰⁾。ヒュームで言えは、自由と因果律は統一的連続性にある。自由と因果律は自然に共演を演じている。「我々は…自然の体系的統一を客観的に妥当する必然的統一として前提せざるを得ないのである。」⁸¹⁾ ここに調和、秩序が存在している。抽象（捨象）化は開いた集

合を編み出す鍵である。

5 自主的秩序を取りまく抽象化、類概念の構造

ハイエクは、これらの判断システムが脳の機構メカニズム、すなわちニューロンがシナプスで結ばれる神経地図にあると見た⁸²⁾。この様相は言語の世界に具体的に現れている⁸³⁾。感覚が言語に表現されて、その認識のメカニズムが明らかにされる。つまり、感覚はそれに止まることなく一般名辞におかれる。感覚の一つのモダリティー（色覚）の質が替えられて用いられる。質は個別的であるがゆえに捨象されて他に移される。ヒュームもカントもバークリーの普遍代表説を継承している⁸⁴⁾。言葉を変えれば集合は開放され、拡張的である。開放的かつ拡張的なのは抽象（捨象）化という脳の機能のおかげである。具体的に言えば、「ライラックの匂いの明るさ」⁸⁵⁾と言語表現されても違和感がないということである。匂いの形容詞を色の形容詞へ、色の形容詞を音に形容し変移しておかしくないというものである。たとえば日本語の「黄色い声」と言っても通じるのであり、日本語としてその表現は正しいのである。言葉による表現は既成観念を超えている⁸⁶⁾。

なぜこれが可能なのであろうか。これはカントの経験的概念に表れている。ヒュームもカントも概念についてはロックの抽象観念を退ける。彼らは共にバークリーを支持して捨象を主張する。つまり、ある対象の概念にたいして、類似による共通な徴表を得るのではなく、共通しない徴表を棄てる方法を採用。ハイエクが述べている、「われわれの経験は彼ら（赤ん坊や動物）よりもはるかに豊饒だが、それはわれわれの精神がより抽象的関連性を備えているからではなく、与えられた要素の属性から導いたものではない抽象的関連性を多く保持しているためである」（かつこ内は筆者）⁸⁷⁾を裏支えしている。それは対象自体から概念を抽象するのではなく、他の属性の多くを所持しその概念のために徴表を棄てるということである。いわば、概念にそもそも体系⁸⁸⁾が意識されていることは言うまでもない。社会科学の認識は判断であり、常に統制（「反省的

自生的秩序の構造的把握（山崎）

判断力」⁸⁹⁾）に基づく構築を含意している。これは自然の斉一性の原理，すなわち「過去を未来の基準とする」と「似た条件のもとで似た結果を生む」一般規則を余すことなく満足させる。この一般規則は既成観念を超える捨象化に依存する。捨象化は類似による。これは脳における出来事なのである。いわば、ハイエクの体系すなわち自生的秩序は、カントの概念機能の延長と読みとれる。自生的秩序の構造は明るさを匂いで形容している世界を含意している。つまり類似を通して拡張を発見している。異なった事象間にある捨象が貫かれているからである。この捨象化のおかげで常に概念は拡張される。この捨象化こそ自生的秩序に不可欠な機能なのである。こうして、ハイエクに捨象化という言葉の世界を具体的事例として確信させたのはヒュームである。

ハイエクは科学を定義して次のように言う。「科学（社会科学）の任務は、正確に言うとは、感覚的印象をその相互の共存に基づいて、あるいは他の感覚的印象とのつながりに基づいて再分類することであり、その結果として新たに構成された当該単位の行動にかんする規則性の確立が可能になるのである。」⁹⁰⁾（かっこ内は筆者）これは自生的秩序形成に不可欠なのは恒常的な再分類⁹¹⁾である。さらに、既述のように「われわれの経験はわれわれの精神がより抽象的な関連性を備えているからではなく、与えられた要素の属性から導いたものではない抽象的関連性をより多く保持しているためである。」これはカントが『判断力批判』で示した「類」概念と軌を一にしよう⁹²⁾。

同じ方法論的个人主義に立脚していたマックス・ウェーバーが科学性を説いて言う。「リッケルト（H.Rickert）の立場が、…わたしの考えでは完全に正しいのであるが、『心理的』もしくは『精神的』諸事実は…類概念や法則による把握」から「出発する限りにおいて」⁹³⁾正しいのである。これは理念に基づく「類概念」（上位概念）を迎え入れる志向的態度⁹⁴⁾を示している。「類概念」は消極的選択を限りなく許す環境を意味している。ドイツ歴史学派を批判してきたウェーバーとハイエクの親近性を見ることができる。これは自由の理論的側面である。「類概念」を志向する態度は慣習や暗黙知として見えないルールを限りなく受容する。その発現はヒュームの抽象性にあり、カントにおいてはア

ナロギー，すなわち類推（Analogie）に根ざした概念にある。ともに，その発現は価値意識にあることは言うまでもない。ハイエクはこれを援用し「価値関連性」として説明したリッケルトを紹介している⁹⁵⁾。そして，経済学はこの抽象化が因果の世界に溶け込んで展開されねばならないのである。

またウェーバーは歴史学派のクニース（K. Knies）を批判して言う。経済学の方法論上の諸問題を論じる場合，「この科学は，人間の行為を一方において自然に与えられた条件，他方において歴史的に規定された条件のもとで取り扱うので，その結果として彼にあっては，人間行為という一面においては人間の『意志の自由』が，他方では『必然性の諸要素』すなわち第一に一自然的条件においては自然生起の盲目的な必然化および第二に一歴史的にあたえられた諸条件においては集合的諸関連の力が決定素としてその考察素材のなかへ『入るこむ』こととなるのである。」⁹⁶⁾ クニースは，前者の「意志の自由」には「予測不可能性」を見て，後者の「必然の諸要素」に法則性をもつと見た。しかし，ウェーバーは，後者から法則を見いだすことに何一つ論理的根拠をもたないと厳しく論難する。社会科学においては，むしろ前者の「意志の自由」こそ類推を可能にするというのである。自由は人間の行為の予測可能性の磁場と考える。「行為者の『決意』が『より自由に』なるにつれて，…動機づけは，…ますます徹底的に『『目的』と『手段』の範疇のなかへ組み込まれ，したがって，その合理的な行為の図式への組み入れもそれだけ完全になされる」（一部筆者修正訳）⁹⁷⁾ と。いわば，消極的選択を限りなく受け入れ，受容性，開放性を確認することができる。ハイエクの自由と多くの点で共通性を見ることができよう。

注

- 1) C.Menger, *Untersuchung über die Methode der Socialwissenschaft, und der Politischen Oekonomie insbesondere*, S. 38.（福井孝治・吉田昇三訳，吉田昇三改訳『経済学の方法』47頁）調和（秩序）を自然の斉一性と考えられる点は，メンガーの次の文章に負う。「われわれがこれからさき精密的およびこの研究方針の目標—それは現象界のすべての領域に一律に追求される1つの研究目標

である一は、現象の厳密な法則を確立すること、すなわち、ただたんに例外のないものとして現れるばかりではなく、われわれのたどる認識通路の点からしてまさに例外のないことの保証を内包している。現象継起のなかでの規則性、一般に『自然法則』とよばれているが、『精密的法則』とよんだほうが正しいだろう現象の法則、を確立することである。」この自然法則はカントからのものであると思われる。またカントの自然法則はヒュームでは自然の斉一性の原理として展開されている。

- 2) 自然の斉一性の原理は「経験されなかった事例は、経験された事例に必ず類似し、自然の歩みは、常に一樣であり続ける」(THN, p. 89. 木曾好能訳『人間本性論』110-111頁)という表現にも見られるように、自然科学的な斉一性のみならず外的世界の存在の信念や人格の同一性の信念にも展開されることは明らかである。
- 3) メンガーは、注釈で『『自然現象の法則 (Gesetze der Naturerscheinungen)』ではなく、『自然法則 (Naturgesetz)』に到達することができる。」と述べているのである。しかも自然法則を、既述のように『『精密的法則』とよんだほうが正しいだろう現象の法則、を確立することである』と述べている。C.Menger, *ibid.*, S. 38. (『経済学の方法』47頁)
- 4) C.Menger, *ibid.*, S. 40. (『経済学の方法』48頁)
- 5) 注1)を見よ。
- 6) THN, p. 131. (『人間本性論』159頁) ヒュームには自然の斉一性の原理を信仰として受け止めているとしか言いようがないほど強く支持する箇所しばしばがある。これはカントが神を背景に哲学を展開したのと同様な重みである。なお自然の斉一性の原理を「一度で十分の原理」と言い換えたのは木曾好能氏である。(木曾好能『人間本性論の解説』523頁)
- 7) ヒュームは「過去を未来への基準とする」(THN, p. 133. 『人間本性論』161頁), 「未来が過去に類似する」(THN, p. 134. 『人間本性論』161頁), 「過去の未来への投影」(THN, p. 165. 『人間本性論』195頁)と言い換え解釈を試みる。しかしこれらはすべて帰納法への試みである。
- 8) ヒュームは、自然の斉一性の原理をしばしば慣習に依存せしめる。(THN, p. 105. 『人間本性論』130頁), いわばヒュームは慣習に生起する因果的観念連合と斉一性という旋律強迫を解明しようとしている。いわば、心が斉一性を求めて広く強迫されるのである。ヒュームは言う、「思惟は、常に、その印象からその観念へ、その特定の印象からその特定の観念へ、いかなる選択あるいは躊躇の余地もなく移行するように、決定されているのである。」(THN, p. 110. 『人間本性論』135頁)
- 9) THN, p. 165. (『人間本性論』195頁) いわば、「習慣から、直接生じるのではな

く、間接的な仕方では生じる」もしくは「慣習を弱める」（*THN*, p. 135.『人間本性論』163頁）なかでの自然の斉一性の原理が展開される。

- 10) *THN*, p. 105. (『人間本性論』130頁)
- 11) C. Menger, *ibid.*, S. 43. (『経済学の方法』51頁) メンガーは言う、「こうした方針にすでに倫理的現象の独特な性質にふさわしい形式を与えてきた。」
- 12) ハイエクのみならずボバーもこの命題に依存していると思われる。漸次的社会工学 (piecemeal social engineering) と変えられる。
- 13) *CL*, pp. 35–36. (気賀健三・古賀勝次郎訳『自由の条件 I』56–57頁) “過去の誤った信念を新しい目的の下に棄却し続ける” はここの箇所を筆者がまとめたものである。
- 14) メンガーの「程度」(*Masse*) という言葉であるが、これはヒュームの次の文章からの引用と思われる。「自然学的必然性をなすのは、対象の恒常的随伴と精神の被決定性である。… (対象の恒常的) 随伴と (精神の) 被決定性とは、異なる種類のこの関係 (必然性, 必然的結合) を生み出すことなく、異なる程度 (degrees) の恒常性と力をもつものであるからである。」(カッコ内は筆者挿入) *THN*, p. 171. (『人間本性論』202頁) を見よ。
- 15) ミーゼスは言う、「人間は根本的論理関係ならびに因果性と目的論の原理と矛盾するカテゴリーを思い浮かべる想像力を持っていないことを、方法的先験主義とでも呼ばざるを得ない。」*HA*, p. 35. (村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』58頁) を見よ。
- 16) *LLL*, p. 36. *Notes*, p. 155. (矢島鈞次・水野俊彦訳『法と立法と自由 I』49頁, 注の199頁)
- 17) アンチノミーとは、カントに依れば所詮理性に対立があることを意味する。定立と反定立が現にあるが、両方とも成り立つのである。例えば、われわれは、一方で消費者として消費者余剰を最大に努めながら、他方では経済に調和を望む。これらは直接的につながらない。一見矛盾するが共に成り立つ。しかしこれらが無制約になり立つものではない。ここに課題が横たわる。つづめて言えば、前者が後者の価値観によって何らかの制約を受けるというものである。これに気付いたのが哲学者・カントである。カントはあくまでも現象にとどまろうとする悟性とそれから脱出しようとする理性とに分けた。まさに人間理性の対立である。理性は上位概念を含意し魂, 世界, 神を理念に掲げる。もちろん, この理性 (理念) は「超越論的仮象」を生み出すおそれがあるから, 批判されねばならない。構成的使用ではなく, 統制的使用でなければならない。カントは『純粹理性批判』の中で超越論的弁証論の付録に「純粹理念の統制的使用について」を加えている。(KrV, S. 670.『純粹理性批判 (中)』p. 305. を見よ。) これは第三批判『判断力批判』を導くものである。そして, これらを調和の間

- 題としてあらためて判断力を唱えた。*KU*, SS. 313–319. (『判断力批判（下）』57–62 頁) を見よ。
- 18) *KU*, S. XXXVII. (篠田英雄訳『判断力批判（上）』47 頁) 類（概念）化については後の節で触れることになる。
 - 19) *CRS*, p. 64. (佐藤茂行訳『科学による反革命』42 頁)
 - 20) *CRS*, p. 41. (『科学による反革命』22 頁)
 - 21) *PPE*, p. 106. (『デイヴィッド・ヒュームの法哲学と政治哲学』135 頁)
 - 22) *PPE*, p. 96.
 - 23) *LLL*, p. 20. (『法と立法と自由 I』30 頁)
 - 24) *NPP*, p. 260. (田中真晴・田中秀夫訳『医学博士バーナード・マンデヴィル』117.)
 - 25) *LLL*, p. 2. (『法と立法と自由 I』9 頁) ここでハイエクは言う。「アダム・スミスが『偉大な社会』と呼び、カール・ポパー卿が『開かれた社会』と呼んでいると。これらは同義に扱われていると。同書の注 (p. 148. 訳書 190 頁) を参照。
 - 26) *CRS*, p. 124 (『科学による反革命』94–95 頁)
 - 27) *CRS*, p. 64. (『科学による反革命』42 頁)
 - 28) *HA*, p. 43. (『ヒューマン・アクション』66 頁)
 - 29) *CRS*, p. 44. (『科学による反革命』24 頁)
 - 30) *CRS*, p. 125. (『科学による反革命』95 頁)
 - 31) *LLL*, p. 6. (『法と立法と自由 I』13 頁)
 - 32) 筆者はヒュームとカントは同様の結論に至った哲学者と考えている。ただ、秩序は何に依るかといえ、前者が自然なら、後者は超越論的な原理である。
 - 33) 後に示すように、この演繹の思惟は理論的妥当性で主張されるのみならず、科学的かつ実証的にもまた主張されるのである。『感覚秩序』はその意味で書かれた。ハイエクの理論は、その意味でヒューム的であり、また E. マッハ的である。カントの概念はハイエクの体系、秩序の先駆と捉えられよう。
 - 34) *LLL*, p. 20. (『法と立法と自由 I』30 頁)
 - 35) *KrV*, ss. 305–306. (篠田英雄訳『純粹理性批判（上）』328–329 頁)
 - 36) *KrV*, SS. 472–478 (『純粹理性批判（中）』125–133 頁)
 - 37) *KrV*, S. 567. S. 574. S. 579. S. 581. (『純粹理性批判（中）』212 頁 218 頁 222 頁 224 頁)
 - 38) *LLL*, p. 6. (『法と立法と自由 I』14 頁)
 - 39) *THN*, p. 131. (『人間本性論』159 頁)
 - 40) *THN*, p. 133. (『人間本性論』161 頁) もし、ハイエクの思想のエッセンスを一言で述べよ、と言われれば、筆者はこのくだりをあげたい。
 - 41) 木曾好能『人間本性論の解説』517 頁, 529 頁

- 42) カントに補完されると言っても、ヒュームがこの点について触れていないというのではない。ヒュームは「精神の内的印象 (an internal impression)」として述べている。カントの方が峻別の点ではっきりしているからである。THN, p. 137. (『人間本性論』165 頁) を見よ。
- 43) *KrV*, S. XXII. (『純粹理性批判 (上)』37 頁)「対象が現象として我々の表象に従う」*KrV*, S. XX. (『純粹理性批判 (上)』36 頁) を見よ。
- 44) 拙著『ハイエク思想の哲学的分析』(国士舘大学政経論叢, 通号 101 号, 1-31 頁, 平成 9 年 9 月) を見よ。
- 45) *KrV*, S. 581. (『純粹理性批判 (中)』224 頁)
- 46) *KrV*, S. 579. (『純粹理性批判 (中)』222 頁)
- 47) *KrV*, S. 580. (『純粹理性批判 (中)』223 頁)
- 48) カントは言う,「経験的性格は, 可想的性格の感性的図式 (Schema) にほかならない」と。*KrV*, S. 581. (『純粹理性批判 (中)』224 頁) を見よ。
- 49) *SO*, p. 4. p. 176. (樺山定登訳『感覚秩序』4 頁, 198 頁) 234 頁
- 50) *KU*, S. 354. (『判断力批判 (下)』99 頁)
- 51) *KU*, S. 355. (『判断力批判 (下)』100 頁)
- 52) 合理論は次のように生じたように思われる。空間を実体としていたのはゼノン (Zenon) である。またデカルトは空間を実体として神の第一の創造物とした。ニュートンはこれを改造して「絶対空間」とし物理学に位置づけた。前二者が空間を神の「創造物」としたのに対して, 後者は神の「属性」とした。これをハイエクは「神人同形論的」(anthropomorphically) と言っている。(NPP, p. 256.『医学博士バーナード・マンデヴィル』112 頁を見よ。) この空間を把握する人間の認識は疑えない確実なものと理解されていた。(cogito, ergo sum の cogito = “我思う”) である。) この我に絶対的理性が宿り合理論を作りあげてきた。しかし, ゼノンのように, 空間を実体とするとこの空間を入れる空間がまた必要になる。これでは際限がなくなる。ライブニッツ, デカルト, ニュートンはのことに気付かなかった。
- 53) ハイエクは不可知論者ではなく懷疑論者ではなかろうか。不可知論者の中には懷疑論に比較して経験 (感覚) の背後にある実在を無視している人々がいるからである。もっぱら経験的事実を現象の肉付けに限ろうとする。ハイエクはあくまでもカントの「物自体」を捨て去っていない。
- 54) *NPP*, p. 250. (『医学博士バーナード・マンデヴィル』p. 102.) マンデヴィルは『蜂の寓話』で言う,「盲目に生まれついていた者が 20 才までそのままにとどまり, それから突如として視力に恵まれたとすれば距離の違いについて奇妙に当惑し, ほとんど自分の杖がとどくところにある柱と, 半マイル離れた尖塔とではいずれが近い, 目だけで直ちに決めることはできない」(和泉治訳『蜂

自生的秩序の構造的把握（山崎）

の寓話』p. 300. および p. 375.) 時間、空間は後述するように体系と秩序の出発点である。

- 55) グレーが述べているように、「ハイエクの考える自発的社会秩序の第三の要素—伝統の自然選択—は、オーストリア学派が固執した接近法、即ち方法論的个人（体）主義の分解・合成的接近法から、彼を引き離すことになる。」つまり、ハイエクの「所論は、自発的秩序に還元しようとしても、そこには必ず限界が伴うことを明示するものである。」(J. Gray, *Hayek on Liberty*, p. 55. 照屋佳男・古賀勝次郎訳『ハイエクの自由論』104-105頁) 確かに、ハイエクに個人に還元する力の弱さを見ることができる。たとえば「自然発生的な形成物を…一度これらの基礎破壊すると…意図的に再建することは我々の力を超えるものであろう」(*IEO*, pp. 24-25. 嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』29-30頁) と。しかし、ハイエク論法を遡及すれば個人に還元せざるを得ない発火点を見る。それは、グレーも触れているが、ハイエクが「規則を言う時、それは常に行爲の規則と知覚の規則、この両者の規則のことであるということ」を、彼は明晰に語っている。」(J. Gray, *ibid.*, p. 33 Notes, p. 170. 『ハイエクの自由論』67頁, 注の270頁) このことは次のことを意味する。ハイエクの核心に形式主義が宿っていることがあげられる。これは自生的秩序というシステムに個人に還元した風穴を開けていることを意味する。なぜなら、そうでなかったならば、「マンデヴィルの心理学的洞察のうちもっと注目すべきもの、とくに、感情によって方向づけられた行為の事後的合理化」として「距離を判別する仕方」の空間を取り上げることはなかったように思われる。確かに、個人に還元する力の弱さをハイエクはもっているが、これは、ハイエクがカント哲学に直接触れる機会が少なかったからだと思われる。筆者は、そのように考えてハイエク論法の発火点にカント哲学を結びつけてきた。ハイエクが述べているように「一般的意見によって是認された一般的原理への委託という要件が、そのときの多数の意志を含むあらゆる権威の特定の意志を有効に制限すればよいということが、すぐわかる。…私の主要関心事であるこれらの問題に関する限り、デイヴィッド・ヒュームやイマヌエル・カント以降、ものの考えはほとんど進歩しておらず、いくつかの点については、われわれの分析は彼らが筆を置いたところから再開されなければならない。価値の地位を全ての合理的構築物から独立した指針条件としてはっきり認識したのは彼らで、その後、彼らの線を越えた者はいない。」(*LLL*, pp. 6-7. 『法と立法と自由 I』pp. 13-14.)
- 56) *THN*, p. 14. (『人間本性論』25頁)
- 57) ヒュームは、空間と時間からもたらされる体系を無限分割不可能と対象が存在する仕方もしくは秩序として主張する。無限分割を支持することによって、有限者の自覚をもつと同時に自然（カントでは理念）のもとでの認識の統一体を

- 目指していることを確認する。*THN*, pp. 39–40. (『人間本性論』54–55頁) を見よ。
- 58) 純粹直観の時間、空間と純粹悟性概念のカテゴリーである。
- 59) 体系は、一つの理念の下における様々な認識の統一体と見た。感性における外官（空間の形式）と内官（時間の形式）の総合や感性と悟性の総合もこの統一体に入る。
- 60) 「根源的に獲得されたもの」(*acquisitio originaria*) とは、生得的ではなく、経験とともに起こる機能を指している。(*Über eine Entdeckung, nach der alle neue Kritik der reinen Vernunft durch eine ältere entbehrlich gemacht werden soll.*, S. 221f. (『純粹理性批判無用論』))
- 61) カントはこれを超越論の対象 (*der transzendenterle Gegenstand*) すなわち *X* と呼んだ。ハイエクにおける *X* も同義であろう。*KrV*, A S. 109. (『純粹理性批判 (下)』157頁) および *SO*, pp. 4–5. (『感覚秩序』12頁) を見よ。
- 62) F. A. Hayek, *Hayek on Hayek, an Autobiographical Dialogue* edited by Stephen Kresge and Leif Wenar, p. 134. (嶋津格訳『ハイエク、ハイエクを語る』169頁)
- 63) ヒュームの自由と因果律についての議論は『人間本性論』の第1巻・第1部第7節「抽象観念について」および第2巻・第3部第1節「自由と必然について」第2節「同一の主題」においてであるように思われる。しかし、その統一的連続性は、『人間本性論』より『人間本性論』の第一巻「知性について」を書き改めた『人間知性の探究』で主張される。これに比して、分析的であったカントは、アンチノミーにおける調停（調和）で議論する必要があった。
- 64) *NPP*, Chapter3, —*The Primacy of the Abstract*— (pp. 35–49. 吉岡佳子訳『抽象の第一義性』—『還元主義を越えて』工作舎, 422–448頁—) これに呼応するように、ハイエクも『新研究』の第3章で「抽象性の一義性」を書いている。しかし『感覚秩序』の方がより明らかである。
- 65) ヒュームは言う。「すべての一般観念は、特定の名辞に結びつけられた個別観念に他ならず、この名辞が、個別観念により広範な意味を与え、必要に応じて個別的観念をして類似した他の個別者（個別観念）を呼び起こさせる、というのである。」(*THN*, p. 17. 『人間本性論』29頁)
- 66) *THN*, p. 20. (『人間本性論』32頁)
- 67) *THN*, p. 22. (『人間本性論』35頁)
- 68) *THN*, p. 20. (『人間本性論』33頁)
- 69) 『人間学』の3節、『純粹理性批判無用論』VIII 199 を見よ。
- 70) *THN*, p. 168. (『人間本性論』198頁)
- 71) *THN*, p. 165 (『人間本性論』195頁)

- 72) SO, p. 19. (『感覚秩序』28 頁)
- 73) SO, pp. 19-20. (『感覚秩序』28-29 頁)
- 74) ハイエクの「感覚」は、カントの言葉で言えば「直感」(Anschauung) であって「感覚」(Empfindung) ではない。なぜなら、「直感」は外延量であるが、「感覚」は内包量である。KrV, S. 203 S. 208. (『純粹理性批判 (上)』237-238 頁 242 頁) を見よ。
- 75) F. A. Hayek, *Hayek on Hayek*, p. 138. (『ハイエク、ハイエクを語る』175 頁)
- 76) KU, S. 331. (『判断力批判 (下)』75 頁)
- 77) カントは作用因の結合と目的因の結合を区別している。因果的結合の作用原因 (die wirkende Ursache) は「機械的結合」(nexus effectivus) と呼ばれる。目的因 (Endursachche) による結合は目的論的関連 (nexus finalis) と呼ばれる。KU, SS. 289-290. (『判断力批判 (下)』32-33 頁) を見よ。
- 78) NPP, Chapter, 3 *The Primacy of the Abstract*, p. 37.
- 79) THN, pp. 21-22. (『人間本性論』34-35 頁)
- 80) KrV, S. 474. S. 478. (『純粹理性批判 (中)』128 頁, 132 頁) カントは言う, 「絶対的自発性」(eine absolute Spontaneitaet) は「超越論的自由」(die transzendente Freiheit) である。
- 81) KrV, S. 679. (『純粹理性批判 (中)』313 頁)
- 82) PPE, p. 73. ハイエクはこれを「多中心的秩序」(polycentric order) と言った。
- 83) F. A. Hayek, *ibid*, p. 134. (同書 169 頁) 「私が得てきたことにオリジナルなアイデアがあるとしてもそれは、実際のところ順序立った推論の過程を経て出てきたのではない。私はいつも自分が、すべての思考が言葉または一般に言語の形で起こる、という流布された主張の生きた証人となった、と考えてきたのである。私は、自分がそれを言葉で表現できるようになるよりずっと前に、問題への解答もっていること—それがまざまざと『見えている』こと—を意識してきたのであって、この点にはこれ以上ないほどの強い確信をもっている。」(一部筆者の修正訳)
- 84) THN, p. (『人間本性論』頁) I. Kant, *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, S.. (『人間学』岩波文庫 26-27 頁)
- 85) SO, p. 20. (『感覚秩序』29 頁)
- 86) 木曾好能『人間本性論の解説』451 頁
ヒュームは言う。「青と緑は、異なる単純観念であるが、青と緋色よりも、たがいにより類似している。しかし、それらの完全な単純性のために類似と相違点の分離または区別の可能性は、まったく排除されている。事情は、個々の音や味や香についても同様である。これらは、同じであるようなどんな共通点をもたずに、全体的な見かけと比較に基づいて、無限に多くの類似性を受け容

れるのである。」 *THN*, p. 673. (木曾好能訳『人間本性論』33頁)を見よ。

- 87) *NPP*, p. 44. (吉岡佳子訳『還元主義を超えて』の10『抽象の第一義性』437頁)
- 88) この概念(体系)は、時間空間、カテゴリーを指し広い意味で秩序であり調和であることは言うまでもない。
- 89) *KU*, S. XXVif. (『判断力批判(上)』36-37頁) 反省的判断力は、特殊だけが与えられていて、それを包摂する普遍がまだ与えられていないが、これを発見しようとすることである。その課題は「自然における特殊から普遍へ昇っていくことである。」
- 90) *CRS*, p. 329. (『科学による反革命』p. 290.)を見よ。
- 91) *SO*, p. 147. (『感覚秩序』169頁)
- 92) *KU*, S. XXXV. (『判断力批判(上)』46頁)
- 93) M. Weber, *Roscher und Knies und die logischen Probleme der hisorischen Nationalokon omie, in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 2 Aufl, 1951, SS 1-145. S. 14* (松井秀親訳『ロッシャーとクニース(一)』30頁)
- 94) 秩序や調和を上位概念に受け入れる価値意識である。ハイエクの演繹的態度はこれに尽きる。
- 95) *CRS*, p. 123. (『科学による反革命』108頁)
- 96) M. Weber, *ibid.*, S. 44. (『ロッシャーとクニース(一)』96頁)
- 97) *ibid.*, S. 132. (『ロッシャーとクニース(二)』128頁)